

中宮寺の歴史

聖徳太子の母である穴穂部間人皇后が 621 年に亡くなった後、彼は宮殿の住居をこの尼寺に変えた。元々ここから 500 メートル東にあった寺は、天皇が奈良から京都に首都を移した平安時代 (794-1192) に衰退し、中宮寺の宝物は法隆寺の隣に保管のために移動された。その中には、聖徳太子の未亡人から依頼され、622 年に天寿国の聖徳太子を描いた寺院の珍しい曼荼羅があった。天寿国繡帳は、日本最古の刺繍であり、重要な仏教的作品であり、鎌倉時代 (1185-1333) に復元された。今日、寺院の堂内にあるものは複製である。オリジナルは奈良国立博物館に保存されている。

桃山時代 (1573-1603) 以来、中宮寺は日本の皇室と強いつながりがあり、伝統的に娘や貴族をここに修行に送り、僧侶の多くは皇室の王女だった。1960 年代、著名な建築家である吉田五十八 (1911-2004 年：高松妃の委任により従事) は、革新的な伝統主義のブランドを本堂に持ち込み、大混乱を引き起こすような火災や地震の衝撃に耐えるように再設計した。1400 年前の菩薩半跏像が堂内をみわたしている。この国宝は衰退しているにもかかわらず、最高傑作とされ、香りや煙、敬虔な信者の思いが何世紀にもわたって今でも美しく保存されている。